

モラルサイエンス研究会（令和2年3月4日）発表要旨

認知症患者の QOL（生活の質）の評価に関する研究：その2. 評価尺度の次元に関する考察

生命環境研究室
客員教授 小山 高正

2025年には700万人になると予測される認知症高齢者も、適切な支援によって通常の老衰と同じ経過を辿ることができる。認知症患者を支援するには、自律、即ち自己決定を支えるパーソンセンタードケアの観点が必要となる。さらに、新オレンジプランにも謳われているように、日常生活圏域における多職種連携を実現する地域包括ケアシステムの確立も不可欠である。さて、適切な支援を継続するには、認知症患者のQOLを評価できるのが望ましい。認知症患者のQOLを測る概念モデルとしてBrodら(2000)は10の次元を提案した。鈴木ら(2005)が翻訳した日本語版D-QoLはその内の6つ（自尊感情、肯定的情動・ユーモア、否定的感情、所属感、美的感覚）を用いているが、高度な認知能力を要求する質問項目が並ぶ。一方、東京都健康長寿医療センター研究所が翻訳した日本語版DEMQOLは、患者自身のほか介護者からも評価ができるが、認知能力とADL評価が中心である。今後、具体的行動をもとにしたルーブリック形式のQOL評価作成を試みたい。